関西大学心理臨床センター紀要，7，91～100，2016

PCAGIP 法研究の動向と課題

関西大学臨床心理専門職大学院　並木　崇浩・小野真由子

要約

本論文の目的は、日本における PCAGIP 法の研究の文献レビューを通して動向を概観し、今後の研究課題と展望について検討することである。検索エンジン、データベース、文献リストを活用し「PCAGIP 法」をキーワードにして検索を行い、収集された論文から 21 件を選定した。研究テーマから、①体験報告、②逐語記録、③他領域での実践、④PCAGIP 法の体系化、⑤ケースカンファレンスとの比較、⑥効果研究、⑦ PCAGIP 法の活用と発展、の 7 つのカテゴリに分類し、研究内容を整理した。得られた結果からこれまでの研究内容について考察し、研究の課題と展望について検討を行った。文献レビューを通して、ルールと手順だけでなく企画者、ファシリテーターの意図や工夫が PCAGIP 法の重要な要素であることが示唆された。以上を踏まえて、①より専門的な研究と実施する上での意図や工夫に関する研究に仮説を立てて実証すること、②パーソンセンタード・アプローチの概念から PCAGIP 法の効果のあり方についてさらに検討すること、を今後の研究課題と展望として提示した。

キーワード：PCAGIP 法、事例検討法、グループ体験、パーソンセンタード・アプローチ

Ⅰ．問題と目的

近年、事例検討法やグループ体験のあり方が問われている。一事例を取り上げ検討する事例検討は、心理臨床の理論と実践力を身に付ける研究方法として、また心理臨床家の養成訓練として、学会や研究会などで発表形態による事例検討会が広く実施されてきた。しかし、その中である問題が生じている。事例発表者がフロアやコメンターから一方的な批判を受けたり、学派間の論争に巻き込まれたりしてしまい、事例検討会が発表者を被告にするような傷つき体験の場になっている。この問題を解決するために、村山・中田（2012a）によって開発された新たな事例検討法が PCAGIP 法（Person-Centered Approach Group Incident Process）である。

PCAGIP 法はパーソンセンタード・アプローチ（以下、PCA と略す）のグループ観にもとづき、インシデント・プロセス（短い事例資料から参加者の質問を通して出来事を明らかにし、問題点の対応などについて考える方法）を組み入れたものである。村山・中田（2012a）は PCAGIP 法を、「事例提供者による簡単な事例提供資料からファシリテーターと参加者が協力して、参加者の力を最大限に引き出し、その経験と知恵から事例提供者に役立つ新しい取り組みの方向や具体策やヒントを見出していくプロセスを学ぶグループ体験である」と定義している。また、PCAGIP 法の簡単な説明として、村山（2012c）が提示している構造と手順を紹介する。

構造

①参加者はファシリテーター・記録者・話題提

供者・メンバーで、８名程度の人数で構成される。
②情報共有のための黒板２枚。
③約束としてメンバーはメモを取らない。
④話題提供者を批判しない。
⑤結論はでなくてもよい。ヒントがでればよい。

手順
①事例提供者はB5判１枚程度の資料を用意する。
②メンバーは順番に質問して、事例の状況を理解することに徹する。
③質問と応答は、黒板に記録者がとる。
④発言が２順したら、ファシリテーターは情報の整理をする。
⑤ファシリテーターは多様な視点がでてくるように自由で安全な雰囲気を創る。
⑥２時間程度で全体の状況が理解できるピカ支援マップが生まれてくる。
⑦おのずと全体が読めて、解決の方向が見えることが多い。

PCAGIP法は事例提供者を被告にしない、安全な事例検討会として、臨床心理士養成指定大学院でのケースカンファレンスや、心理臨床学会のワークショップで行われてきた。さらに村山・中田（2012a）によると、心理臨床の領域だけでなく、対人援助職や管理職などを対象とした、教育や福祉、産業の領域へ応用がされている。その背景として、対人援助者を支え、成長を促すことや、対人援助に関する新たな気づきが起きることといったPCAGIP法の論理が、心理療法やカウンセリングの事例検討法だけでなく、心理的サポートの新たなアプローチとして有用なのではと考えられたことが挙げられる。その結果、コミュニケーションを促す場となることや村山・中田（2012a）、ピア・サポートの機能（望月，2013）などが示唆され、開発当初に意図していた以上にPCAGIP法の効果や機能に広がりがあると期待され始めている。

このようにPCAGIP法はさらなる実施と研究の発展が期待できるだろう。この発展途中の段階において、今までに行われてきた研究テーマや方法、そして結果と考察を一度整理し、現在抱えている課題やこれまでの研究に対する批判点を明らかにすることは、今後のPCAGIP法の実践と研究のさらなる発展につながるだろう。そこで本論文では、文献レビューを通してPCAGIP法に関するこれまでの研究を概観し、今後の研究課題と展望の検討を目的とする。

Ⅱ．方法

CiNii、Google Scholarを活用し、2015年10月14日に「PCAGIP」をキーワードとして検索を行った。さらにPCAGIP法研究を調査するために、以下のPCA関連の文献リストを活用した。パーソンセンタード・アプローチに関する日本の文献リストとして、“日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト”（坂中，2009,2010,2011,2012,2013,2014）と、“日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト（2014）”（坂中，2015）から、またグループ体験に関する日本の文献リストとして、“わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト”（野島・坂中，2009,2010,2011,2012,2013,2014,2015）から、タイトルに「PCAGIP」と記載されている文献を抽出した。そして、抽出された文献の引用文献からさらにタイトルに「PCAGIP」と記載されている文献を抽出した。PCAGIP法は日本で開発され、開発されてから歴史が浅いことから本論文では検索する範囲を国内に限定した。

次に、対象となった文献レビューを行った。研究者名、刊行年、タイトル、掲載元、要約、カテゴリをデータ化し一覧表（表１）を作成した。内容から研究テーマを分類したカテゴリは、共同研究者間で検討し妥当性を保持した。

Ⅲ．結果

CiNii では 3 件、Google Scholar では 2 件がヒットした。次に、“日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト”（坂中，2009,2010,2011,2012,2013,2014）では 10 件、“日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献（2014）”では 2 件、“わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト”（野島・坂中，2009,2010,2011,2012,2013,2014,2015）では 5 件が抽出された。そして、論文の引用文献から 7 件が抽出された。以上、抽出された文献は合計 29 件あった。今回収集できた文献のうち、内容が重複しているものを除外し 21 件を選定した。

研究テーマのカテゴリとして、①体験報告：PCAGIP 法の事例と参加者の感想の報告、②逐語記録：PCAGIP 法の一事例の全逐語、③他領域での実践：心理臨床以外の領域での実践報告、④ PCAGIP 法の体系化：PCAGIP 法の開発に関する考察、⑤ケースカンファレンスとの比較：従来の事例検討法と PCAGIP 法の比較、⑥効果研究：PCAGIP 法の効果研究、⑦ PCAGIP 法の活用と発展：PCAGIP 法を事例検討とは異なる活用方法、以上 7 つに分類を行った。

刊行された論文数の年次推移を図 1 に示した。2008 年に初めて刊行され、2010 年に論文数が増加している。2015 年の論文数が 1 件であるのは、2015 年の論文が検索時点（2015 年 10 月 14 日）で、まだ公表されていないことが考えられる。

図 1　論文数の年次推移

次に、7 つのカテゴリの割合を図 2 に示した。なお、1 つの論文に複数のカテゴリを割り当てた際、それぞれのカテゴリを 1 つとして加算して割合を算出している。①体験報告が 37％と最も多く、①体験報告の論文の姉妹編として刊行されている②逐語記録と合わせると半分の割合を占めていた。

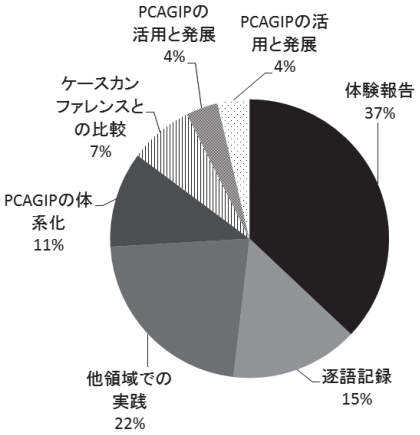

図 2　論文のカテゴリ別割合

次に①から⑦に分類したカテゴリ毎に、研究の結果や考察から得られた知見をまとめた。

①体験報告

PCAGIP 法の開発初期の段階に書かれたものが多い。実践を通してルールや手順の意義、ファシリテーターと記録者の役割について考察されている。さらに、参加者のコメントから PCAGIP 法を体験することの意味の新たな発見がされている。一つの事例の詳細な記録が載せられており、③逐語記録に分類されている姉妹編とされている論文と並列して読むことで、初学者や PCAGIP 法を体験したことがない人でも実際の進み方や雰囲気を感じ取りながら学ぶことできる。

②逐語記録

①体験報告と同様、PCAGIP 法の開発の初期段階に書かれたものが多い。逐語を通して PCA-

GIP 法のありのままの様子を知ることができる。また、ファシリテーターの発言の意図が解説されており、ファシリテーターの役割の学びにもつながる。

③他領域での実践

教育や福祉、産業の領域、他職種や当事者同士で PCAGIP 法をする意義について研究がなされている。PCAGIP 法が関係構築の場となり、横のつながりを作るきっかけになり得たこと、またピアサポートの機能や、チームアプローチの構築を促進する機能を果たしたことが述べられている。心理臨床の領域の事例検討法としてだけでなく、他領域にも応用が可能であることなど、新たに示唆された PCAGIP 法の意義について論じられている。

④ PCAGIP 法の体系化

PCAGIP 法の基本概念や手順、ルールを体系化してまとめている。また、実際の事例も記載されており、理論と実践を並行して学ぶことができる。

⑤ケースカンファレンスとの比較

従来のケースカンファレンスとの比較から、PCAGIP 法による事例検討法のメリットとデメリット、限界について考察されている。PCAGIP 法は、参加者全員が質問することで進行していくため、積極的に発言することに戸惑いやすい初学者が発言する機会の確保や、多様な発言の保障をしたい際には有用である。しかし、自由に発言をしたい参加者にとってはフラストレーションがたまることや質問形式がパターン化する可能性などのデメリットが示唆されている。PCAGIP 法の限界として、治療経過の詳細な内容や具体的なやり取りの検討は困難であるという考察がなされている。また、PCAGIP 法のメリットを活用できる条件についても考察されており、目的や状況に合わせて従来のケースカンファレンスと使い分けをしたり、形式を柔軟に変更したりする必要性が論じられている。

⑥効果研究

PCAGIP 法の効果を量的に測定している。PCAGIP 法を行ったことで、不安や抑うつ、怒りといったネガティブな感情が減少し、活力が増加したことが示されている。他のカテゴリの研究の多くはアンケートやインタビューによる質的研究であり、PCAGIP 法の効果の量的研究が行われ始めていることが示されている。

⑤ PCAGIP 法の活用と発展

夢 PCAGIP というグループワークの紹介がされている。夢 PCAGIP とは、PCAGIP 法と夢フォーカシングを参考にしており、夢をテーマにして夢提供者が自身の夢の意味を見出すことを援助するワークである。PCAGIP 法の手順やコンセプトを基に新たなグループワークの試みがなされている。

Ⅳ．考察

文献レビューを通して得られたこれまでの研究の動向を整理する。また、収集された文献を概観したことで新たに考えられた PCAGIP 法の重要な要素について述べる。それらを踏まえて、これまでの研究に対する批判点と課題を論じ、今後どのような研究テーマや方法が考えられるか、PCAGIP 法研究の展望を考察していく。

1）PCAGIP 法研究の動向

PCAGIP 法はこれまで、開発者である村山を中心にルールと手順を確立させながら、意義や効果の検討が行われてきた。その後、他の研究者による研究が行われ始め、様々な観点が研究テーマとなっていった。PCAGIP 法の事例検討法としてだけでなく、コミュニケーションを促す機能を重視するようになり、さらには心理臨床の領域の大学院生やカウンセラーだけでなく、医療・福祉領域の他職種、産業領域では管理職や市役所職員、当事者と多岐にわたる領域と対象者に実施されてきた。このように、開発当初に意図された事例検討法として用いられるだけでなく、広い意味で捉えたグループアプローチとして用いられるようになったり、PCAGIP 法

の手順とコンセプトとフォーカシングを組み合わせた新たなグループワークとして用いられるまでに発展してきている。また、今回収集された論文は 21 件と数が少なく、その多くが紀要論文やポスター発表である。これは、2008 年から始まった PCAGIP 法の研究がまだ広がり始めた段階にあることを示しているだろう。

2）PCAGIP 法の要素

PCAGIP 法は、考察の 1）PCAGIP 法研究の動向からわかるように、様々な領域や対象へと応用範囲が広がっている。これは村山・中田（2012a）が指摘しているように、PCAGIP 法の形式がシンプルであることが要因の一つといえるだろう。しかし、応用範囲の広がりにより目的や対象の違いに違いが生じることで、同じ手順とルールに則っていても PCAGIP 法の用い方や捉え方に違いが生じていることが文献レビューを通して浮かび上がってきた。

同じルールと手順で実施していても、現場の状況、目的や経緯、メンバー構成などによって PCAGIP 法の形は変わっているといえる。このように、同じ領域と対象であっても PCAGIP 法のあり方は異なることから、対象の違いによっても PCAGIP 法の実施までの経緯が異なったり、準備に工夫がされている。例えば、井出（2013）は対象とした施設職員と共に、ケースカンファレンスのあり方に関するディスカッションを事前に行っている。宇都宮（2014）は、母親グループを対象にし、彼女たちの成長を促すグループを模索した中で PCAGIP 法を導入している。対象や領域が大きく変わらない場合でも PCAGIP 法のあり方には違いが生じる。村山ら（2008b）；村山・神明（2010d）の逐語記録をみると、臨床心理学を専攻している大学院生という領域と対象が同じであっても、実施されるセッション毎でいろいろな進み方、グループの動き方があることがわかる。むしろ全く同じ PCAGIP 法の経過が起こり得ないことは当然である。そのため、PCAGIP 法を実施する上で形式に則るだけでなく、企画者やファシリテーターは、準備段階や実施中に個々の実践に対して異なる意図を持ちながら多様な工夫を凝らしている。このように、PCAGIP 法では、企画者、ファシリテーターの意図や工夫が重要なポイントになっていると考えられる。

3）PCAGIP 法研究の課題

文献レビューを通し、研究内容を概観したことで新たに得られた知見から、PCAGIP 法研究の課題として、より専門的な研究、実施する上での意図や工夫に関する研究、の 2 つを提言しこれらについて考察していく。1 つ目の課題、より専門的な研究について述べる。表 1 の要約をみると、これまでの研究では参加者の感想を基に考察し、効果や意義を検討するという研究方法が多いことがわかる。研究方法に量的分析を用いているのは、望月（2013）のみであった。このように、専門的な分析方法を用いた研究が現段階では不十分といえる。PCAGIP 法を行い、結果的にわかったことを考察するだけではなく、ある仮説を立ててそれを実証していくことがより専門的な研究のあり方の一つとして考えられる。そのためには、研究の目的をより明確し、逐語内容や感想、質問紙といった、取り得るデータの中でどれを分析に用いるのか、そして得られたデータをどのように分析すれば仮説を実証できるのかといった、研究デザインを熟慮していくことが重要であろう。

次に 2 つ目の課題として挙げた、実施する上での意図や工夫に関する研究について述べる。考察の 2）PCAGIP 法の要素で論じたように、PCAGIP 法を実施する上で、形式だけでなく企画者、ファシリテーターの意図や工夫が重要であることが示唆された。しかし、その要素が研究する上で扱われてこなかった。これまでの研究では、ルールと手順がどのような意義を持つのか、機能や効果にどうつながっているのかというテーマを扱った研究が多い。レビューを行った文献の中には、徳田（2014）が事例発表者

のニーズに沿った事例検討の方式を用意するポイントとして“安全性・共同性・指導性”を挙げていることや、村山ら（2010c）がファシリテーターの発言の意図の解説をしており、意図や工夫に焦点を当てた考察や試みがいくつか見受けられるものの、十分な研究がされてきたとはいえない。今後の研究では、行われた実践により近いPCAGIP法の形として、実施した条件に対する意図や工夫について明示することが必要だといえる。

表１　タイトルに「PCAGIP」と記載されている論文

研究者名			掲載元	要約	カテゴリ
村山ら	(2008a)	エンカウンターグループとインシデントプロセスを組み合わせた新しい事例検討法(PCAGIP法)の実際(Ⅰ)－PCAGIP法の実際例の報告－	東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要	目的 / PCAGIP法の意義や有効性の検討 方法 / 大学院生を対象にPCAGIPを実施し、参加者の感想を収集 結果 / ファシリテーターと記録者の役割についての言及や「批判しない」ルールの有効性、意義について簡単に述べられている	体験報告
村山ら	(2009)	エンカウンターグループとインシデントプロセスを組み合わせた新しい事例検討法(PCAGIP法)の実際(Ⅲ)－PCAGIP法の実際例の報告と考察－	東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要	目的 / PCAGIP法の意義と有効性の検討 方法 / 大学院生を対象にPCAGIPを実施し、参加者の感想を収集 結果 / ファシリテーターと記録者の役割についての言及や「批判しない」ルールの有効性、意義（参加体験・従来のカンファレンスとの比較）、PCAGIP法における問題解決について述べられている	体験報告
村山ら	(2010d)	PCAGIP法の体験実習　：　参加者の報告と感想	佛教大学臨床心理学研究センター紀要	目的 /金魚鉢グループを置いたPCAGIP法の実践記録を提示し、参加者の体験についての考察 方法 /大学院生を対象に、参加者を金魚グループと金魚鉢グループに分けてPCAGIPを実施し、参加者の感想を収集 結果 / ファシリテーターや書記の役割、グループ体験のプロセスの変化、第2ステップの必要性などについて論じられている	体験報告
日笠ら	(2011)	パーソンセンターアプローチ流の事例検討のあり方Ⅱ－PCAGIP法の実際－	日本心理臨床学会第30回大会発表論文集	目的 /体験を通してPCAGIP法を学ぶ 方法 /企画者がデモンストレーションを行ったのち、参加者を含めてPCAGIP法を実施する 結果 /発表者の安全を守る事例検討のあり方の可能性や有効性について話し合われた	体験報告
村山ら	(2012a)	新しい事例検討法 PCAGIP入門 パーソン・センタード・アプローチの視点から	創元社	理論編と実践編の二部構成となっている。理論編では、PCAGIP法の理論と体系化された方法が書かれている。実践編では、参加者の感想や体験記録から、従来のケースカンファレンスとの違い、適用可能性などについて考察されている。	体験報告 他領域での実践 PCAGIPの開発
村山ら	(2013)	PCAGIP法の実際(Ⅵ)－参加者の体験報告－	東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要	目的 / PCAGIP法の体験報告を実践のための資料として公開すること 方法 / 大学院生を対象にPCAGIPを実施し、参加者の感想を収集 結果 / 順番に発言するルールの意義、「PCAMAP」の重要性への言及と実例の提示、PCAGIP法によって「事例検討の課題」がどう変化するのかについて述べられている	体験報告
村山ら	(2014a)	PCAGIP法の実際(Ⅶ)	東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要	目的 / 心理臨床の専門家のスタイルと異なるのPCAGIPの逐語記録と体験報告を提示すること 方法 /地域の社会人、大学院生、子育て支援サークルの人たちを対象にPCAGIPを実施し、参加者の感想を収集 結果 /PCAGIPの実施する際、参加者の特徴を考慮してPCAGIPが展開できる構造を工夫することが必要であると述べられている	体験報告 逐語記録
村山	(2014b)	PCAGIPセミナー	立命館大学心理・教育相談センター年報	臨床心理領域の大学院生と教員、カウンセラーを対象に行ったPCAグループワークのセミナー記録集。PCAグループワークの座学講義と、夢ワークとPCAGIP法の体験学習を行っている内容を逐語に近い形でまとめている。	体験報告
村山ら	(2008b)	エンカウンターグループとインシデントプロセスを組み合わせた新しい事例検討法(PCAGIP法)の実際(Ⅱ)－事例の逐語記録－	東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要	目的 / 実施したPCAGIPの逐語記録を今後研究していく上での臨床的事実として提供すること 方法 / PCAGIP全逐語記録を掲載 結果 / 逐語記録のみ	逐語記録
村山ら	(2010c)	PCAGIP法の実際（Ⅳ）－1事例の逐語記録－	東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要	目的 / 逐語記録だけでなく、ファシリテーターの解釈を入れる事でさらに検討を深めること 方法 / 大学院生を対象にPCAGIPを実施し、全逐語記録を掲載 結果 / 逐語記録のみ	逐語記録
村山	(2012b)	PCAGIP法の実際（Ⅴ）-2事例の逐語記録-	東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要	目的 / 実施したPCAGIPの逐語記録を今後研究していく上での臨床的事実として提供すること 方法 / PCAGIP全逐語記録を掲載 結果 / 逐語記録のみ	逐語記録
坂本	(2011)	スクールカウンセリングにおける教員研修の実践に関する研究 ： PCAGIP法を参考にした事例検討について	人間環境大学人間環境学部紀要	目的 / 教員研修での事例検討の実践としてPCAGIP法の有効性や課題を検討 方法 / 教員を対象にスクールカウンセラーがファシリテーター役を引き受けPCAGIP法を実施 結果 / 職員同士の連携強化の経験になることなどが考察され、事例検討のプロセスを詳細に検討する必要性も言及されている	他領域での実践
井出	(2013)	児童養護施設における“機能する事例検討会”の創造―PCAGIPを用いた取り組み	日本人間性心理学会第32回大会プログラム・発表論文集	目的 / 福祉領域でのケースカンファレンスとしてPCAGIP法を実施し、意義と効果を検討 方法 / 福祉領域で働く職員を対象とし、感想をKJ法を用いて分類 結果 / アイディアを創出するだけでなく、職員同士が相互援助的に機能する事に貢献する方法の一つであることが述べられている	他領域での実践

研究者名		タイトル	掲載元	要約	カテゴリ
湯本	(2013)	市役所職員を対象としたグループアプローチの実践報告―PCAGIP法で育てる“元気の芽”―	日本人間性心理学会第32回大会プログラム・発表論文集	目的 / 市役所職員を対象とする際のPCAGIP法の意義について検討 方法 / 市役所職員を対象とし、事例提供者は自己紹介を行ってからPCAGIPを全3回実施し、その後感想を収集 結果 / 相互理解に基づく信頼関係構築や、肯定的な変化や満足が得られ、職場横断的なコミュニケーションが創造される場になると述べられている	他領域での実践
宇都宮	(2014)	障碍を持つ子供の母親への支援―PCAGIP法を使ったグループワーク―	日本心理臨床学会第33回秋季大会発表論文集	目的 / 障碍を持つ子どもの母親のピアグループの方法としてPCAGIP法が有効であるのか検討 方法 / 障碍を持つ子どもの母親を対象にPCAGIP法を実施 結果 / 同じ施設であるため情報共有の時間を短縮でき、1時間での実施が可能であること、参加者全員がグループに参加できること、参加者が当事者同士であり育児への自信が促されると述べられている	他領域での実践
村山ら	(2011)	パーソンセンタード・アプローチの挑戦ー現代を生きるエンカウンターの実際ー	創元社	PCAGIP法の定義、方法、体験者の感想記録が掲載されており、ファシリテーターや記録者の役割、「批判しない」ルールの有効性、参加体験の意義、臨床カンファレンスとの比較について考察がまとめられている	PCAGIPの体系化
村山ら	(2012c)	人間性心理学会ハンドブック	創元社	PCAGIP法が開発されるまでの経緯、PCAGIPの構造と実施方法、PCAGIP法の展開状況（適用範囲）について簡潔にまとめられている	PCAGIPの体系化
仙頭	(2014)	心理臨床センタースタッフ研修におけるケースカンファレンスに関する一考察 ：従来のケースカンファレンスとPCAGIP法の比較を通して	明治学院大学心理学部付属研究所年報	目的 / 状況と目的になったケースカンファレンスのあり方を検討 方法 / 従来のケースカンファレンスとPCAGIP法を比較 結果 / 従来のケースカンファレンスとPCAGIP法のメリット・限界。適している状況や目的について述べられる	ケースカンファレンスとの比較
徳田	(2014)	事例検討法をめぐる考察ーPCAGIPをヒントにしてー	立命館大学心理・教育相談センター年報	目的 / PCAGIP法と従来の事例検討を比較し、よりよい事例検討のあり方について検討する 方法 / 筆者のPCAGIP参加の体験とPCAGIPを実施した体験から、従来の事例検討と比較 結果 / ファシリテーターと記録者の役割を一人が行うことで機能が異なる点、PCAGIP法のメリットと限界について述べられている	ケースカンファレンスとの比較
望月	(2013)	若手心理臨床家の事例検討法としてのPCAGIPの効果検討	日本人間性心理学会第32回大会プログラム・発表論文集	目的 / PCAGIP法の効果を検討 方法 / 若手心理臨床家を対象にPCAGIP法を全14回実施し、実施の前後で質問紙調査（日本版気分プロフィール検査と心理的ストレス反応測定尺度）を実施 結果 / 全ての尺度において有意差が見られ、気分改善と活力増加の効果があること、そしてピア・サポートの機能も持ち合わせていることが述べられている	効果研究
筒井	(2015)	夢 PCAGIP の試み ―グループにおける相互作用の活用―	関西大学臨床心理専門職大学院紀要	目的 / PCAGIP法に夢解釈を応用したグループワークである夢PCAGIPを試み、検討 方法 / 大学院生を対象にPCAGIP法の手順で夢フォーカシングを実施 結果 / 夢をグループで扱う方法とも比較しながら夢PCAGIPの特徴について述べられている	PCAGIPの活用と発展

4）PCAGIP 法研究の展望

前述した PCAGIP 法研究の課題を踏まえて、今後どのような研究テーマや方法が期待されるだろうか。まず挙げられる研究テーマは、今回示唆された、企画者、ファシリテーターの意図や工夫が PCAGIP 法の重要な要素であるかについてであろう。これは今回の文献レビューから得られた仮説であり、実証していかなければならない。提言した課題から考えると、実施前に行った準備や取り組みが、その後の PCAGIP 法に与える影響、実施中のファシリテーターや参加者の発言と他の参加者、話題提供者との相互作用の検討などが今後の研究テーマとして挙げられるだろう。

また、より専門的な研究を進める中で、PCAGIP 法における PCA としての効果が研究テーマとしてさらに検討されることが望まれる。PCAGIP 法は PCA の考えを援用して開発されている（村山・中田，2012a）ことから、PCA の概念が PCAGIP 法の効果の手掛かりになるのではないか。例えば、PCA は人間の建設的なパーソナリティ変化が起きることを目指している（Rogers, 1957）。つまり PCA がもたらす効果は、一時的ではなく長期的なものであるといえるが、これを PCAGIP 法の効果として考えるという研究テーマが考えられる。このように PCA の概念から PCAGIP 法の効果のあり方についてさらに検討することで、新たな PCAGIP 法の効果の可能性が見出されていくだろう。

謝辞

本論文の執筆にあたり、丁寧にご指導してくださった中田行重先生に感謝いたします。

文献

日笠摩子・村山正治・堀尾直美・佐藤文彦・宮沢志津枝・小坂淑子・野々口知子・亀田久美子・久羽康（2011）パーソンセンターアプローチ流の事例検討のあり方Ⅱ──PCAGIP法の実際──，日本心理臨床学会第30回大会発表論文集，700.

井出智博（2013）児童養護施設における“機能する事例検討会”の創造──PCAGIPを用いた取り組み，日本人間性心理学会第32回大会プログラム・発表論文集，162.

望月洋介（2013）若手心理臨床家の事例検討法としてのPCAGIPの効果検討，日本人間性心理学会第32回大会プログラム・発表論文集，88.

村山正治・石津寛子・金城総・仙石裕樹・坂元美和・柴田妙・則安総一郎・福山剛・増田仁美・松嵜順子・三木北斗・村田裕美（2008a） エンカウンターグループとインシデントプロセスを組み合わせた新しい事例検討法（PCAGIP法）の実際（Ⅰ）──PCAGIP法の実際例の報告──，東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要，8，3-10.

村山正治・石津寛子・金城総・仙石裕樹・坂元美和・柴田妙・則安総一郎・福山剛・増田仁美・松嵜順子・三木北斗・村田裕美（2008b） エンカウンターグループとインシデントプロセスを組み合わせた新しい事例検討法（PCAGIP法）の実際（Ⅱ）──事例の逐語記録──，東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要，8，11-23.

村山正治・江口尚子・衛藤萌・小埜優依・黒川明宏・立川隆一・久留玲子・前泊麻理菜・松田有加・三澤篤・山口瑞穂・奥原孝幸（2009）エンカウンターグループとインシデントプロセスを組み合わせた新しい事例検討法（PCAGIP法）の実際（Ⅲ）──PCAGIP法の実際例の報告と考察──，東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要，9，3-13.

村山正治（2010a）新しい事例検討法──PCAGIP法の実習，九州臨床心理学会妙録集，38，21-28.

村山正治（2010b）新しい事例検討法──PCAGIP法の実習──事例報告者を被告にしないカンファランスの在り方を求めて，日本人間性心理学会大会，29，10.

村山正治・池田紘子・大石沙耶香・北田朋子・新開佳子・杉浦崇仁・田中正江・中村加奈・古野薫・村上恵子（2010c）PCAGIP法の実際（Ⅳ）──1事例の逐語記録──，東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要，10，43-66.

村山正治・神明悠司（2010d）PCAGIP法の体験実習：参加者の報告と感想，佛教大学臨床心理学研究センター紀要，16，87-96.

村山正治（2011）PCAGIP法の開発，伊藤義美・高松里・村久保雅孝（編）パーソンセンタード・アプローチの挑戦──現代を生きるエンカウンターの実際──，創元社，307-319.

村山正治・中田行重（編）(2012a）新しい事例検討法 PCAGIP入門──パーソン・センタード・アプローチの視点から──，創元社.

村山正治（2012b）PCAGIP法の実際（Ⅴ）──2事例の逐語記録──，東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要，11(1)，45-84.

村山正治（2012c）PCAGIP法，日本人間性心理学会（編）人間性心理学会ハンドブック，創元社，388-389.

村山正治・江口尚子・江藤萌・小埜優依・黒川明宏・立川隆一・久留玲子・前泊麻理菜・三澤篤・山本有加・山口瑞穂・奥原孝幸（2013）PCAGIP法の実際（Ⅵ）──参加者の体験報告──，東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要，13，37-44.

村山正治・古野薫・村上恵子・近藤崇史・新開佳子・楠美枝・北田朋子・畑中美穂（2014a）PCAGIP法の実際（Ⅶ），東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター紀要，15，65-82.

村山正治（2014b）PCAGIPセミナー，立命館大学心理・教育相談センター年報，12，1-61.

野島一彦・坂中正義（2009）わが国の「集中的グル

ープ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト（2008），九州大学心理臨床研究，28，165-179.

野島一彦・坂中正義（2010）わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト（2009），九州大学総合心理臨床研究，2，101-121.

野島一彦・坂中正義（2011）わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト（2010），九州大学総合臨床心理研究，3，185-198.

野島一彦・坂中正義（2013a）わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト（2011），九州大学総合臨床心理研究，4，143-162.

野島一彦・坂中正義（2013b）わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト（2012），跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要，9,3-18.

野島一彦・坂中正義（2014）わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト（2013），跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要，10，3-25.

野島一彦・坂中正義（2015）わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト（2014），跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要，11，5-23.

押江隆・宮武ゆかり・瓜崎貴雄（2010）他職種との協働に向けたグループ・アプローチによる研修会の検討(2) ── 精神科ソーシャルワーカーと臨床心理士によるPCAGIP法を用いた事例検討 ──，日本心理臨床学会第29回大会発表論文集，376.

Rogers, C. R.(1957). The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change, *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), 95-103.（伊東博・村山正治（監訳）(2001）カーシェンバウム・ヘンダーソン（編），ロジャーズ選集（上），誠信書房，265-285.）

坂本真也（2011）スクールカウンセリングにおける教員研修の実践に関する研究：PCAGIP法を参考にした事例検討について，人間環境大学人間環境学部紀要，2，85-96.

坂中正義（2009）日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2008），福岡教育大学「心理教育相談研究」，13，9-29.

坂中正義（2010）日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2009），福岡教育大学「心理教育相談研究」，14，27-50.

坂中正義（2011）日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2010），福岡教育大学「心理教育相談研究」，15，29-50.

坂中正義（2012）日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2011），福岡教育大学「心理教育相談研究」，16，1-20.

坂中正義（2013）日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2012），福岡教育大学「心理教育相談研究」，17，1-23.

坂中正義（2014）日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2013），南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」，13，231-255.

坂中正義（2015）日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト（2014），南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」，14，241-274.

仙頭彩奈・深津典子（2014）心理臨床センタースタッフ研修におけるケースカンファレンスに関する一考察：従来のケースカンファレンスとPCAGIP法の比較を通して，明治学院大学心理学部付属研究所年報，7，53-62.

徳田完二（2014）事例検討法をめぐる考察 ── PCA-GIPをヒントとして ──，立命館大学・教育相談センター年報，12,62-68.

筒井優介（2015）夢 PCAGIP の試み ── グループ

における相互作用の活用―，関西大学臨床心理専門職大学院紀要，5，73-81.
湯本幸平（2013）市役所職員を対象としたグループアプローチの実践報告―PCAGIP法で育てる“元気の芽”―，日本人間性心理学会第32回大会プログラム・発表論文集，116.
宇都宮敦子（2014）障碍を持つ子供の母親への支援―PCAGIP法を使ったグループワーク―，日本心理臨床学会第33回秋季大会発表論文集，173.